厳のしらかし

《白檀中学校だより 第１４号》
令和８年 ３月２４日発行
文責： 校長　西村 拓司

保護者の皆さまへ

この１年間、本校の教育活動に対し、格別のご理解とご支援、ご協力を賜りましたこと、心より感謝申し上げます。来年度も、私たち教職員一同、誠心誠意、教育活動に邁進する所存です。引き続き、どうぞよろしくお願い申し上げます。

第５６回卒業証書授与式を終えて

春の訪れを告げる奈良・東大寺二月堂の「お水取り」も終わり、頬に当たる風にも少しずつ暖かさが感じられるようになりました。そのような中、去る３月１２日、本校体育館において「第５６回卒業証書授与式」を挙行しました。４２名の生徒が卒業証書を手に、白檀中学校を巣立っていきました。

式では、在校生代表として２年生の佐々木明莉さんが、卒業生への感謝とエールを込めた心温まる送辞を読み上げてくれました。また、卒業生を代表して３年生の菊地拳さんが答辞を述べ、支えてくださった多くの方々に向けて、次のようなメッセージを送ってくれました。

「先生方が作ってくださったお便りには、いつも私たちへの賞賛や応援の言葉が綴られており、それが私たちの大きな力になりました。事務員さん、用務員さん、カウンセラーの先生、学校ボランティアや地域の皆さんのおかげで、私たちは安心して学校生活を送ることができました。三年間、ともに過ごしてきた仲間がいたからこそ、何気ない毎日が宝物でした。とても幸せでした。
そして、十五年間、いつも一番近くで見守ってくれた家族へ。たくさん心配をかけたけれど、愛情に包まれ支えられて、ここまで成長することができました。いつも僕たちの味方でいてくれて、本当にありがとう。」（要約・抜粋）

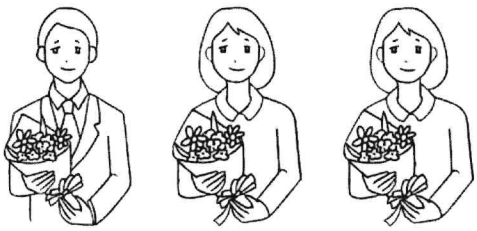
さらに、答辞の途中では、卒業生全員で『卒業の歌・友達の歌』を合唱しました。会場全体が感動に包まれ、心に深く響くひとときとなりました。多感な思春期の中で感じたさまざまな思いを、純粋な感性で歌い上げたこの歌声は、卒業生の心にも、そして私たちの心にも、いつまでも色あせることなく残り続けることでしょう。４２名の卒業生の皆さんの前途に、幸多き未来が広がることを心から願っています。

第５６回卒業証書授与式　校長式辞

（後半部分抜粋）
三年生のみなさんに、一つだけ言葉を贈ります。
それは、「人生は一冊の問題集」という言葉です。
この問題集は、他の誰かに解いてもらうことはできません。
教科で学ぶように必ずしも正解があるわけではありません。
迷うこともあり、涙が止まらない日もあるでしょう。
けれど、その一問一問に向き合った時間こそが、経験となり、教訓となり、
やがて宝物に変わっていくのかと思います。
しかし、今という時代は、予測困難な時代と言われるくらい大きく社会が変わろうとしています。
デジタル社会が進み、生成AIの活用もできるようになりました。
その利便性を活用する術をもつのは必要不可欠なことと思います。
しかし、生成AIは、人の努力や苦労、流した涙を感じ取ってはくれません。
自分の語りたい自分らしい素直な言葉が、
いつの間にか「自分らしくなくなっている」こともあります。
そんなこともふまえて「人生という名前の問題集」を解くキーワードは
「人と人とのつながり」「心のふれあい」「愛や絆の力」かと私は考えています。
「自分の幸せ」だけではなく、「人の幸せ」を想うことによって、つながりが生まれ、
人として豊かに成長していけるのかと思います。
これからの人生で、もしも困難にぶつかって、解決の糸口が見つからなくても、
点と点が、いつか線につながる日が来て、「あの経験があったから今がある」
と思える日が必ず来ると思います。
「人生は一冊の問題集」
この言葉を、心のどこかで、ぜひ、覚えておいてください。

結びになりますが、卒業生の保護者の皆様、お子様のご卒業、誠におめでとうございます。
今、義務教育を終え、立派に成長されたお子様の姿を見て、感無量の思いでいっぱいだと思います。
今日まで、本校の教育活動に対し、多大なるご支援とご協力をいただきましたこと、
本校、教職員一同心より感謝申し上げます。ありがとうございました。
それでは、白橿中学校第五十六期生、卒業生の皆さん。
輝く未来に向かって歩んでいきましょう。
みなさんの前途が、光に満ち、幸せに満ちたものでありますように祈念し、
そして、会場にいるすべての皆様の幸せを祈念し、私の式辞とさせていただきます。

令和八年三月十二日
橿原市立白橿中学校
校長　　西村 拓司

【今年度をもって離任される教職員】

井上　博	教頭	（退職）
中西多恵子	教諭	（異動）
芳川　優祈	事務職員	（異動）